

公表 児童発達支援事業所における自己評価総括表

| | | | |
|-----------------------|-----------------------------|--------|----|
| ○事業所名 | デフノバハウス | | |
| ○保護者評価実施期間 | 2025年 2月 18日 ~ 2025年 3月 17日 | | |
| ○保護者評価有効回答数 (対象者数) | 2 | (回答者数) | 0 |
| ○従業者評価実施期間 | 2025年 2月 18日 ~ 2025年 2月 18日 | | |
| ○従業者評価有効回答数 (対象者数) | 4人 | (回答者数) | 4人 |
| ○事業者向け自己評価表作成日 | 2025年 2月 11日 | | |

○ 分析結果

| | 事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|--|---|--|
| 1 | 専門性の高い支援。12年以上の臨床経験を持つ言語聴覚士（特に7年間は聴覚障害児支援に特化）による質の高い個別支援が提供できる。 手話に精通したスタッフの存在 15年以上手話を学び続けている代表が中心となり、手話での自然なコミュニケーションが可能。安心して通える環境を提供。 | 手話だけでなく、視覚的な情報保障の工夫。 筆談、写真・イラスト・実物を活用して、情報を「見える形」で提供。 支援内容や一日の流れも、視覚化することで安心感を確保。 | QRコードを活用し、個別の「取扱説明書（トリセツ）」を提示できる工夫も検討中。 理念を共有し、手話や発達支援に精通したスタッフを育てることで、支援の質をさらに高める。 |
| 2 | 主体性を育てる関わり方。 「どうする？」「やってみる？」など、選択肢を提示して自分で考える・決める機会を多く設ける。 「自分で考え、行動する」力の育成。 子どもたちが受け身ではなく、自ら選び、発信し、社会と関わることを促すプログラム設計。 | 授業内で自分たちで考えてもらうプログラムや、プロセスを考えそれらを共有する力、どの様な着地にもっていくか等、子ども達と共に考えながら行っている。 | 宮城県へ防災学習に行き、それらの取り組みを行つただけでなく、感じたこと、学んだことを他者に伝えてより防災への関心などを高めてもらう機会を設けるなど行う。 |
| 3 | 社会とつながる体験活動。 地域のお店での交流、Deafの大人との対話会、遠足や「未来留学」などの体験を通して、「自分の世界」が広がる機会を意識的に設定。 「こんな大人になりたい」というロールモデルとの出会いを支援。 | マルシェへの出店やカフェ体験などを通して考える力や対応力を育む機会を設けている。 | マルシェや様々な体験を一度の経験で終わるのではなく、繰り返し経験することで失敗を成功にかえる方法やさらなるチャレンジができる様、繋がりを大切にしている。 未来留学を6月より実施。 |

| | 事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われるこ | 事業所として考えている課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等 |
|---|--|--|--|
| 1 | 人的リソースの不足。 【課題】手話や発達支援に精通したスタッフの数がまだ限られており、個別ニーズに十分対応できない場面がある。 | 専門性の高いスタッフの採用が難しい。特に手話対応ができる人材が地域に少ない。 | 手話研修や内部勉強会によるスタッフ育成。 大学・専門学校と連携し、実習やインターンを通じた人材育成の場づくり。 Deafスタッフの採用や育成にも取り組む |
| 2 | 受け入れ環境の物理的制約。 【課題】施設の広さや設備が限られており、多様な活動や静かな個別対応の両立が難しい場面がある。 | 現在の物件の構造上、複数活動の同時進行が難しい。 | 活動スケジュールを工夫し、空間の使い分けを徹底。 将来的には拠点の増設や移転も視野に、防音パネルや仕切りの活用など環境調整に投資を検討。 |
| 3 | ICTの活用が発展途上。 【課題】視覚的支援や情報保障に関して、ICT機器の活用がまだ十分でない。 | 機器の整備コストや、スタッフのICTスキルの差。 | iPadやタブレットの導入、視覚支援アプリの活用を進める。 スタッフへのICT研修の実施。 |